

# 文化庁月報



1985-10

No. 205

## 【表紙】

江戸市村座上演

「三五月須磨写絵」より

解説は9ページ

題デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

## もくじ

### 特集：芸術祭40回記念

#### 回想の芸術祭

福原匡彦 4

芸術祭40周年・放送開始60周年記念

アジア民族芸能祭 8

昭和60年度(第40回記念)芸術祭祝典を挙げる 9

#### ——座談会——

芸術祭40年を振り返って 10

#### ▽芸術祭・エピソード

- ・「放浪記」とともに 森光子 20
- ・受賞の時…… 福原百之助 20
- ・美しいものを楽しく 森下洋子 21
- ・芸術祭大賞を受賞して 金井彰久 21

#### ▽芸術祭小史年表

—40年のあゆみをたどって— 22

#### ▽報告

##### 第9回全国高等学校総合文化祭

—イーハトーヴォに花開いた

高校生の芸術文化の祭典— 24

#### ▽展覧会

日本の陶磁 東京国立博物館 28

ゴッホ展 国立西洋美術館 29

- 新任あいさつ 30
- “美をもとめて”コーナー 30
- 文化庁行事報告及び予定 30
- 国立劇場ニュース 31

# 回想の芸術祭



福原 匡彦

## 工夫をこらす芸術祭

昭和三十年十月、それまで岐阜県教育委員会にいた私が文部省に出て来て、芸術課課長補佐の席にすわったときは、ちょうど第十回芸術祭の真つ最中で、課長以下総勢十人あまりの芸術課員は、それこそ天手古舞の状態だった。はじめから協道にそれて恐縮だが、そのころ、群馬交響楽団の丸山勝広氏が県の教育長といっしょに群馬県音楽モデル県にしてくれという風変わりな陳情書を携えて芸術課に現われ、その応待を私がしたこと、この地方文化の鬼・丸山氏との三十年のつきあいが偶然にはじまるのだが、それも芸術祭で課員が全部出払って、新米の私がたったひとり部屋の留守番をしていたからである。

そのときから三年半ばかり、私は課長補佐をつとめたが、芸術祭担当の課長補佐は別にいたから、第十回から第十三回までの芸術祭については、課の中でお手伝いをするという立場であった。そのころの思い出といえ、一つは演劇脚本と音楽楽曲の公募が期待に反して成果が得られず、尻つばみになっていたことである。ともに第八回からはじめられ、入賞脚本・入

賞楽曲は芸術祭主催公演としてその年度に上演されるというものであったが、良い作品が集まらない上に、上演という条件も足かせとなった。脚本については、第十一回からそれまでの歴史劇という枠を抜けて現代物まで含めることとしたが、第十二回の入選作はついに上演を見ず、第十三回には一幕物だけを募集するなど工夫をこらしたが、入選作は得られなかった。結局、第十四回には見込みなしとして募集を中止している。楽曲についても、第九回は入選作がなく、第十一回から交響楽曲のほかに合唱曲を加えたり、第十二回からは合唱曲だけを対象としたが、これも第十五回からは募集中止の運命となっている。のちに私は国立劇場にいたとき、歌舞伎脚本募集の仕事をして、上演に堪える脚本を求めることがいかに困難であるかをもう一度体験することとなったが、入選作品を選んだ同じ年度のうちに上演するという芸術祭の企画は、それ以上に無理があったように思う。

戦後、因会と三和会の二派に分裂していた文楽の合同公演が実現を見たのもこのころで、第九回には素浄りがいっしょの舞台に上っただけだったが、第十回には人形を加えての同一舞台公演、第十一回には同じ演目に両派がいっしょに出演する名実備わった合同公演、第十二回には芸術祭執行委員会の企画と

おりに両派のメンバーが出演する完全な合同公演、というぐあいに四年がかりでこの難事業は完成している。私ははたから眺めていただけだが、ここまで話を運ぶための関係者の労苦にはなみなみならぬものがあつたようだ。この合同公演の実現がのちの両派統合による文楽協会結成の素地をつくったことを思えば、これは芸術祭という場を利用した大きな収穫だったのである。

そのころ、芸術祭は芸術課の最大の仕事であった。もちろん、大臣賞の芸術選奨とか、名作美術展の地方巡回とか、青少年音楽演劇指導者の研修とか、日本芸術院の事務とか、いろいろやっていたけれども、外部から見ると目立つのは芸術祭だけだったので、国の芸術行政は芸術祭だけなのかと悪口をいわれたりもしていた。私の担当は、芸術院会館や国立西洋美術館の建設、それに入場税の減免やら美術工芸品への物品税の減免などであったが、そうした地味な仕事は芸術行政の中にあることはほとんど知られていなかった。国の芸術行政としては、もっといろいろしなければならぬことがあるのを痛感していたけれども、予算も人員も乏しい芸術課としてはどうしようもなかった。芸術祭の予算にしたところわずかなもので、昭和二十五年にいったん五百万円計上されたものが、そのころは四百万円位に落ちこんでいたのではなかったかと思う。

## 芸術祭批判の声をのこす

そのうち、昭和三十四年四月に私は芸術課長となった。そして、第十四回から第十六回までの芸術祭については執行委員会事務局の責任者として仕事をしたのである。大体空気は知っていたからやりやすかったが、思ったよりもげんじと感じたのは、芸術祭に対する風当たりが強かった。新聞雑誌などに現われるいわゆる芸術祭批判である。

この芸術祭批判の代表的なものは、芸術祭が創始された昭和二十一年ごろにはたしかにこれも必要だったかもしれないが、すでに存在の理由はなく、やめた方がいいという議論である。周知のように、芸術祭は初代芸術課長今日出海氏の卓抜な発想に基づいてはじめられたもので、敗戦によって荒廃した国民の精神生活に生氣を送るとともに、わが国にもこれだけの素晴らしい芸術の伝統があるということ、占領軍を含めて内外に誇示しようとする試みであった。だから、当時こそ意義を持っていたが、占領軍は去り、国民の生活も一応安定を見、芸術界も隆盛に向ってきた今日、その意義はもう終わっているとするのがこの考え方であり、なるほどもっともな意見にはちがいないが、しかしながら、十年あまりを経過するうちに、芸術祭は今氏の構想を乗りこえて独り歩きをはじめていた。これは芸術祭という命名にも一因があつて、文字どおり芸術のフェスティバルと化し、芸術界の各部門は、芸術祭という土俵にのぼって意欲的なさまざまな企画を展開し、価値ある成果を上げはじめていたのである。従って、いかに芸術祭無用論が横行しようとも、芸術界の年中行事として定着してきたという現実は無視することができない。場を提供する役所としても、予想以上に芸術振興の実が挙がっていることにむしろ感謝をしなければならず、もはやこの芸術祭をやめるなどということは許されない状況であった。

また、芸術祭をやめてしまえという議論の中には、役所がほんのわずかな予算しか持たないにせよ主催者づらするのはけしからんという声もまじっていた。たしかに予算は貧弱だったのだ、この点は努力するより仕方がなかったが、ただ、私の見る限り、役所は裏方に徹していて、決して主導権を握るなどという大それたことはしていなかった。芸術界の事情に明るくそれぞれの分野を代表する方々に芸術祭執行委員会の委員になって

いただき、その方々が中心となって芸術祭は動いている感じだった。そして、各部門とも委員の人数が比較的公正妥当に行われており、信頼度の高い委員構成になっていたから、多少の強い批判にも堪え得たのではなかったかと思う。

## 芸術祭の大衆化

さて、私が芸術課長として担当した時代は、芸術祭の歴史の上では大衆化が目立った時代として「芸術祭十五年史」同三十年史」の中に記述されている。特にそうしたこと意図したわけではないが、時代の流れが芸術祭にも反映したのであろう。

その一つ、しばらく芸術祭から遠ざかっていた東宝の演劇が菊田一夫氏の重役就任とともに再び接近してきたのを機会に第十四回の主催公演としてお願いした現代劇「がめつゝ奴」が空前の当たりとなり、この公演で主役を演じた三益愛子には芸術祭賞が授与された。授賞式当日、まだロング・ランで芝居が続いていて、その舞台から扮装のままの姿で駆けつけ文部大臣から賞状を受けとった姿が、今も臉に焼きついている。

その二つは、第十五回の大衆芸能部門にはじめて漫才が参加したことである。その参加にあたり、参加規程の中に漫才という文字がなかったため少々ためらった。しかし、これは規程の方が不備なので、私は審査委員の先生方と相談した上で参加を認めることとした。十五年史の安藤鶴夫氏の文章によれば「花も実もある福原芸術課長の決断によって」ということになるが、こんなところで役所の意地を通す必要はなかったのである。さて、その公演当日、コロンビア・トップ、ライトの両人が舞台の上から、客席の審査委員やわれわれ役人を一人ずつ呼び上げては立たせ、芸術祭に初参加できたのはこの人たちのおかげだと聴衆に拍手させる場面もあった。

その三つは、第十六回的主催公演として「芸術祭狂言の会」

として芸術祭批判の対談記事が載った。悪口には馴れっことなっていたが、中に「このごろ十五年史が作られたけれども、誤植だらけで」というような発言があった。誤植はむしろ少ないと自負していただけに、その無責任な誹謗にはくやしい思いであった。その記事のおかげで、大臣にも呼ばれて「芸術祭は評判が悪いじゃあないか」といわれ、「あの意見は不当な偏見に基づいています」と答えたことを覚えていてる。

## 地方での文化を育てよう

こうして第十六回は私は芸術祭を離れることとなったが、一つ、置き土産として第十七回に引き継いだものがある。それは「三市交響楽団特別演奏会」である。この拙文の冒頭に群馬交響楽団の丸山氏とのめぐり合いのことに触れたが、いつも夢のようなことを構想してはそれを実現に持っていく丸山氏の、これもその情熱の所産であった。わが国の文化は東京に偏重しており、地方で文化を育てることの困難は想像に絶するものがあるが、その困難と長年戦ってきた群馬交響楽団（高崎市）が同じ仲間の京都交響楽団（京都市）・札幌交響楽団（札幌市）と組んで、同一舞台に立つという画期的な演奏会を芸術祭主催公演として行ったのである。第十七回は高崎、第十八回は札幌、第十九回は京都と三年連続して開催されたが、地方交響楽団としては大きなデモンストレーションであった。芸術祭の側から見ても、とかく東京だけの芸術祭といわれる非難にこたえた意義ある催しだったということが出来る。

その後、社会教育課長や文化財保護委員会事務局長や国立劇場理事長をつとめたときは、職務上、芸術祭の特別委員というものに委嘱されたが、特に国立劇場のときは、仕事のつながりもあって執行委員会総会にできるだけ顔を出した。特別委員は

を開催したことである。第一回から毎年趣向をこらして続けたきた能楽の主催公演が行きづまり、第十四回でいったん休止符をつけたが、それに代わるものとして何がいか検討していたとき、すでに数年の実績を持つ白木ホールでの「白木狂言の会」にならって、狂言だけの会を芸術祭でやってみたらと思いつき、私が提案したものである。ともすると能の付属物として扱われ、必ずしも正当の評価を受けていない狂言を能から切り離して取り上げ、この庶民的な古典芸能を独立した演劇として大衆に結びつけようという試みであった。この主催公演は翌年の第十七回にも引きつづき行われ、二度とも成功裡に終わったけれども、企画委員の方々は番組編成に非常に苦勞されたという記憶がある。

もう一つ、私の課長時代の出来事として特記しなければならぬのは、ちょうどこの時期、芸術祭という場を利用して、テレビ・ドラマが目覚ましい進展を見せたことである。視聴者の急速な増加、ドラマ制作技術の進歩などを背景として、テレビ・ドラマはたまたま上昇機運に乗っていたが、芸術祭はその恰好の起爆剤となった観がある。というのは、芸術祭参加作品には比較的多額の制作費をかけることもあって、民放各社とNHKとが芸術祭賞を争い、しのぎを削ることとなり、その結果として、平生放映されるドラマの枠をこえて、すぐれた芸術作品がつぎつぎに生み出されたからである。その競争の激化過熱によって、日常番組が犠牲になるなどという弊害も現われ、批判を浴びたりもしたが、芸術祭の存在がテレビ・ドラマ発展向上のために演じた役割は、何といっても評価すべきものであろう。ところで、私の在任中、芸術祭も十五回を数えるにいたったので、その変遷のあとを資料として残すために「芸術祭十五年史」を編集することとした。幸い、各方面の協力を得て、大体考えた通りのものが出来上がった。ようやく第十六回芸術祭祝典の日に間に合い、関係者などにも配布してほつとしていたとこ

一般に出席がよくないのだが、その席で当時の国立教育会館長小林行雄氏によくお目にかかった。小林氏は私の三代目の芸術課長でいらっしやるだけに、やはり格別の懐かしさがおありになったのであろう。

## 芸術文化の創造と進展をめざして

私も何年か担当したということで、芸術祭には言い知れぬ深い愛着を覚えていてる。今年は芸術祭もいよいよ第四十回を迎えたわけだが、その歩みが必ずしも平坦な道ではなかったことを知るだけに、無量の感慨がある。

これまでの芸術祭を見直し、第四十回以後の芸術祭のあり方を検討するために、一昨年から昨年にかけて芸術祭懇談会が開かれた。私も委員としてその席に連なったが、こうして時代の流れとともに芸術祭が軌道修正をしながら内容を充実させていく姿には大いに敬意を表したい。芸術祭はマンネリズムにおちいついてるという批判が絶えずあるけれども、毎年のように工夫をこらし改善を加えていたのであって、決して慣行の上にあぐらをかく行ないたことではない。第二十四回と第四十回との機会に特別の再検討が行われたが、これは大きな飛躍のために行われたのであって、普通の再検討はいつも行われていたのである。この私のささやかな回想の記録からも、その事実はじゅうぶんお汲みとりいただけるものと思う。

最後に、わが国芸術文化の創造と進展のために、これからも芸術祭が大事な役割を果たしつづけることを祈ってやまない。

福原・匡彦（ふくはら・まさひこ）

文部省芸術課長、文化財保護委員会事務局長、社会教育局長、国立劇場理事長などを歴任。現在は、山梨県立県民文化ホール館長。

# 芸術祭40年を振り返って



## 〈出席者〉(五十音順、敬称略)

安達 健二 芸術祭執行委員会委員長  
吾妻 徳穂 舞踊家  
北村 一夫 演芸評論家  
田辺 秀雄 音楽評論家  
登川 直樹 映画評論家

福田 一平 舞踊評論家  
藤田 洋 演劇評論家  
宮澤 縦一 音楽評論家  
〈司 会〉  
渡辺 通弘 文化庁芸術課長

## 邦楽と洋楽の橋渡し そしてレコード部門の設置

司会 本日はお忙しいところを、お集まりいただきまして、ありがとうございます。皆様、ご承知のように昭和二十一年に初代の芸術課長であった今日出海先生の発案によって発足した、この芸術祭も昭和六十年で四十年を迎えることになるわけです。

本日お集まりの方々は、この芸術祭をお育てくださった方々ですので、芸術祭の歴史を振り返りながら、この芸術祭が果たした役割あるいは将来への展望等について、お話しをいただければと考えております。

田辺先生には、昭和二十八年から芸術祭のいろいろな分野でご指導をいただいているわけですが大先輩として、四十年を振り返って、感想などをお漏らしていただければと思います。

## 田 辺

そうおっしゃいましたけれど、当時は私が一番の若僧でしてね。まだ三十代でした。そのころの音楽部門は邦楽と洋楽と分かれていたんですが、ちょうど私が委員を仰せつかったころから、それを一緒にしよう、ということになりました。その結果、いろいろな問題が出てきました。最初のころは洋楽が非常に盛んで、当時、活躍された一流の方が盛んに参加されて、文部大臣賞なり何なりをお取りになった。ところがそのうちに段々変わってきてまして、邦楽のほうが一flowの方が参加して、しかも家元クラスの方がどんどん参加さ

ことで非常に邦楽が盛んになった。実は邦楽と洋楽を一緒にすることにはいろいろ反対もありまして、分けるべきであるという意見が何通も出されました。それをそのまんま続けてきたということは、大変なことだったと思うんですね。

この結果、洋楽界に対しても邦楽が注入されてくる。そしてまた邦楽界に対しても、洋楽の演奏会形式だとか、いろいろなものが入ってくるということになってきたと思うんですね。そして邦楽と洋楽の境目目が、ほとんどなくなってしまう。そういうことに對しても芸術祭というのは、非常に大きな影響があったと思います。

それからもう一つ、当時、放送や映画は芸術祭に参加していたのに、レコードが参加してなかった。それを私がぜひ参加させてくれというのを申し上げて、二年間かかりまして、認めて頂きました。

私は、レコード参加の意義はディレクターとかプロモーターが、普段やりたい、それからまた開拓をしたが、できないというプランをできるようにしてあげることにあるのではないかと考えておりました。しかし、これが段々経つうちに、やっぱり商業主義



田 辺 秀 雄 氏

## 音楽部門のエピソードあれこれ

### 宮澤

感想が沢山ありますし、昔から現在まで大変な激動の時代でしたからいまでも想像のできないようなエピソードが沢山ありました。

さつき田辺さんがお話しになったうで、印象深いのは、とにかくレコード部門を入れるということ

ですから、会社同士の競争というが、ことは賞をもらった、もらわないということ、賞をとれなかったディレクターたちが上から責められるということなどいろいろな問題があつて、恨まれたこともあったかもしれません。

しかし、もしレコード参加がなかったとしたら、解説ものや意義の高いレコードがあつたように発展することはできなかったと考えています。

何といつても四十年という年月は、日本の国が一番激動した時代ですから、あらゆる芸能の世界が大きく変わった。だから芸術祭も、どんどん変わって行かなければならない。手直しがいいでは、ほんとはいけないんじゃないかということを、私は考えております。

### 司会

田辺先生と並び、この芸術祭の大先輩であられまして、いまでは芸術祭執行委員長代行ということで、さらに中心的な指導をいただいております宮澤先生から、四十年を振り返って、いろいろ感想、エピソードなどございましたら、ご披露いただきたいと思います。

で、これについては随分もん着がありましたね。初めはレコードの参加は童謡が多かったんです。それから、少しほかのものもいいたら、今度は外国からきた名演奏家や、いままでも出てないような非常にめずらしい作品を、やたらと出しました。それはしだいに参加者がみんな凝り出しちゃったんです。オペラ公演もまた最初のころは大変で、関西歌劇団が入った「フィガロの結婚」の合同公演があり、したら関西からきた歌い手さんのセリフが関西なまりだったんですよ。叙唱ができないのでセリフにしたのですがね。そうするとお客がそこで笑っちゃって、オペラが全然先へ進まなくなっちゃったりしてね。まあ、いろんなことがありました。

それから、創作では大衆に理解されるようなものがないということで、安易におもねったような、オペラが作られたり、今度は逆に聴衆不在みたいな、やたらと新しい手法を織り混ぜて木に竹をつないだようなのが出てきたりしました。芸術祭にも電子音楽が出てきたことがあります。そういう新しいものが出てくると、みんなそれを取り上げたり、随分いろんな議論が出ました。

私はこの前、音楽部門の三十年史を書いたのですが、音楽のエピソードだけでも一冊できますよ。

邦楽と洋楽を接近させたことやジャズやポピュラーも芸術祭に参加するようになったことなど、とにかく芸術祭の功績は随分ありますね。

また反対に国の事業だからということで、ことさらそれを無視しようというような動きがあったり、国の芸術祭なら、もっと予算を出してくれ、という声も出しましたね。



宮澤 健一氏

司会  
宮澤先生から、いろいろお話を聞いて  
たしますと、芸術祭がここまで育つには  
いろいろ大変だったなということが痛感  
されるわけです。

そこで安達先生は二代目の文化庁長官ということ  
で、芸術祭の裏方を演じられたわけですが、そうい  
った立場から、何かございましたら、ひとことお願  
いいたします。

### 芸術祭予算の移り変り

安達  
いま裏方というふうなお話が出ました  
けども、舞台の裏方というより台所方で  
すね。金を調達するというのが、一つの大き  
きな役目でした。芸術祭は、昭和二十一年のときは  
予算なしで始まったわけで、昭和二十五年に五百万  
という予算が付いた。私がこの芸術祭のほうにかか  
わりを持ちましたのが、昭和三十一年からですが、  
そのころ大抵一千万円前後ではなかったかと思いま  
す。それから五十年まで十年ほど、台所方を勤めさ  
せていただいたわけですよ。

生に、いまでも長い間、この芸術祭にお加わりいた  
だいたご感想なり、あるいはそこからのいろいろな  
問題提起などございましたら、お願いいたします。

### 舞踊の地位向上をめざして

吾妻  
何だかあまり立派な方々の中でしゃべ  
るの気後れがいたします。私が初めて  
参加させていただいたのは「赤猪子」だ  
と思います。そのときもびくびくしてましてね。果た  
して賞がいただけるものか、どうか。

実は私は、その頃、アメリカに永住しようと、一  
時日本を離れた。そして、骨を折り、踊りが踊  
れないという状態で日本に帰ってまいりました。し  
かし、日本ではお医者様にそんなに悪くはない、ち  
よつとやってごらんさいと言われたんです。そこ  
へ、花柳宗哲さんがいらして、賞の一つもあなたに  
取らせたいんだ、舞踊家の名折れだから、何とか会  
をやってちょうだいとおっしゃるわけです。そのと  
き私は家元に弟子をお譲りしてしまっていたので  
が、あなたのことだからできるでしょうといわれ  
たら、やっぱり踊りの虫だものだから、それじゃや  
ろうかな、できるのならもう一遍日本でやってみ  
たいなと思って作ったのが「徳穂の会」なんです。

それが、「赤猪子」で素晴らしい賞をいただいたも  
のですから、私としても忘れられない作品なんです。  
私は、こういうものをいただいたら、どのくらい踊  
りの値打ちが上がるのかといった欲がないんです。  
ただ、踊りが好きなんです。ただ、一生懸命踊って、



安達 健二氏

しかし、考えてみますと、四十年、よくぞもった  
といつちや語弊がありますが、そういう感じが一つ  
あるんです。よくもったというのは、一つは国の予  
算というものが最少であるといえども、一応統いて  
おったためだろうと思います。

半面、執行については、民間の方々を主体とした  
執行委員会の先生方が企画を立て審査をされる、昔  
流でいえば官民協調型で、民間と役所が一緒になっ  
て育ててきた、ということが良きにつけ悪きにつ  
け、ここまで続いた理由だと思います。先輩の方々  
も非常にご苦労なされたのですが、予算というのは  
何かきつかけがないと、なかなか増えないものです。  
そのきつかけを狙ったところ、ちょうど昭和四十  
三年が明治百年記念ということで、政府はいろい  
ろ催しをせよというお声がかかりがあったわけで、こ  
れこそチャンス到来ということで、オペラ、演劇、パ  
レエの脚本や楽曲の創作委嘱を始めたわけですよ。演  
劇は大仏次郎先生に「三姉妹」を、オペラは石井欽  
さんに「嬰姿と盛蓮」を、そしてバレエは三島さん  
に「ミラング」をそれぞれお願いしました。

またこの年に「アジア民族芸能祭」を、ちょうど  
放送開始四十年を迎えていたNHKとタイアップで  
みんなにこたえてもらいたいというので今日まで  
しました。

ただ、いま皆様のお話をうかがってますと、踊り  
はほんとうに立ち遅れておりますね。踊りというの  
は、いつも申すんですけれども、谷間なんです。国  
にとってはやはり能、文楽、狂言、歌舞伎、これが  
もう最高のものなんです。ところが私にいわせる  
と、能も、狂言も、お芝居もできな過ぎや駄目とい  
うのが踊りなんです。今では、踊りの位置が、ずっ  
と上がってはまいりましたけど、それでもまだ下な  
んですよ。だけど、私はこんなことではいけない  
と確信してんです。

踊りをする方の中には芸術祭の賞を目指して毎年  
毎年一生懸命にお金を使ってやってくる人もあります。  
この賞を取った人は、何々賞があるからということ  
で、いろんなところにも頼まれるし、一つの勲章な  
んですよ。だから、私はこの芸術祭賞をお出しに  
なる時は、非常に公平な目で見たいな気がします。  
かえって踊りに関係のない人が見たほうがいいよ  
うな気がするんです。私は踊りを知らない人が見て、  
何だかわかんないけどよかったというものが、最高  
のものだと思うんです。



吾妻 徳穂氏

やらせて頂きました。この「アジア民族芸能祭」の  
おかげで、明治百年記念にふさわしい芸術祭ができ  
たんじやないか、と思っています。

また芸術祭が、マンネリ化してるから見直しをし  
ようということで、四十三年には、内村直也さんや  
故江口博さんに集まっていたらご検討いただき、  
新しく協賛公演を作ろうというご提案を頂きました。  
ここから、今日のような主催、参加協賛公演という  
三本柱が立ったわけですよ。

それから、もう一つ芸術祭の地方巡回というよう  
なことで、移動芸術祭というのが始まったわけですよ。  
これは初め一億円くらい行っただけですが、民  
間の芸術団体の方が、非常にご苦労なされて応援し  
て下さったおかげで、結局、八千五百万円という予  
算が付いたということで、芸術祭の地方化に役立っ  
たのではないかと思います。

これはいまの課長さんに、もっと予算を取れなん  
ていうことを、けしにかけているわけじゃないんで笑、  
当時は、ちょうど経済の高度成長時代なんですよ。  
四十八年が石油ショックで、その前でしたから、要  
求して、それをちゃんと理論づけして実行可能で、  
しかも意味があるんだということを知ってもらえば、  
予算が付いたという時期の話なんで、いまは、緊縮  
財政の時期ですから、なかなかむずかしいですね。  
今いろいろお話をうかがいましたように、  
安達先輩の時代に、いまの芸術祭の形と  
いうものが整ったわけで、私どもはそれ  
を何とか維持しているというのが現状といえるかと  
思います。

次に、賞をお取りになるという立場から、吾妻先

またことしは芸術祭熊本公演で踊らせていただ  
けるそうですけど、向こうの方にも賞があげられ  
るうにしておいていただきたいと思ひます。というこ  
とは、やはり、地方は地方で一生懸命だと思っ  
てます。参加公演が東京だけというのは、何かお気の  
毒なような気がします。

どうもありがとうございました。

### 司会

いま、芸術祭というものが舞踊の世界  
においても、一つの役割を果たしたとい  
うお話をうかがったわけですが、また、同時に  
審査の問題などもお触れ頂きました。

今度は舞踊の部門で五十二年以来、企画や審査を  
おやりいただいております福田先生に、いま吾妻先  
生のお話にもあったような点についてお話をうかが  
いたいと思います。

### 吾妻

お願いします。うかがいたいです。

### 遊びの精神をもつと大切に

### 福田

まず私の場合は、初めは舞踊の演出を  
やっておりまして、参加する側の立場で  
芸術祭を見ていたわけですよ。その後、文  
化庁の在外研修員で海外に出していたから、主  
権公演をやらせていただきまして、その後、逆に  
企画委員、審査委員として今度は企画や審査を  
側になったわけですよ。だから芸術祭に対しては三  
つの異なったかわり合い方を持ってきたわけですよ。



福田 一平氏

それぞれにいろんな感想はあるのですが、初めてのころは邦舞の方が洋舞の審査をなさったりしてるのを見てみると、とても抵抗がありました。洋舞の人が日本舞踊がわかるんだろうかというような疑問がありました。

だが、先ほど田辺先生が、洋楽、邦楽が一つになることによって、また一つの新しい芸術が開けていったということをおっしゃいましたが、そのことと同じように、洋舞も邦舞も、いいものはやっぱり誰が見てもよくわかり、いい悪いをきちっと見分ける人が、審査員に入っておいでなので、その点はあまり心配しなくてもいいのではないかと思うようになりました。

私が芸術祭にかわり始めたのは、五十二年からで前のことはわかりませんが、最近以前と違って審査が厳しくて、いいものがない年は賞を出さないで、おこうという態度を貫いてきました。例えば昨年度は舞踊部門に三十七公演が参加して、賞は優秀賞が一点だけです。審査委員たちの間に、ほんとにいいものがあれば何点でも出すけども、ない年には無理して出すのは、折角、いままに受賞した方の賞の価値をかって汚すんじゃないか、という考え

があるからです。これは舞踊以外のことですけれど、いつも渡辺課長に申し上げるのは、ヨーロッパなどであれだけの費用をかけて、世界的な音楽祭がいくつも行われているのに、日本は国家がやってくる芸術祭が、何でこんなにみつちい予算なのかということ。フランスでは文化予算を国家予算の1%にするかどうかという中で、いまだ熱い論争が起きています。ところが日本では0.1%弱の文化予算すらもほとんど削られている。これは、あんまり、というような感じがいたしておりました。

でも、それはいま安達先生から経済成長期の昭和四十六年度ころまでに、移動芸術祭を作るまでのご苦労をうかがって、やっぱり、それぞれの立場で、その道ではいろいろご苦労があるんだなということが、よくわかりました。

しかし、偉大なる芸術を生んでる国の歴史を振り返って見ますと、あそこが、人間性を求めた遊びの精神みたいなものを大切に、最高のものを生む。そういうような国が大きな文化を残して、つたりいたします。

それからもう一つは、アジア民族芸能祭が、ちょうど十年ごとに行われておりますけども、これは非常にいい企画で、こしも芸術祭が見直しになって、見直しになった割に外側から見ると、ほとんど代わり映えがないような印象を受けるなかで、やっぱり光っている企画じゃないでしょうか。これは安達長官のときに始めていただいたことが、とてもいま生きているような感じがいたします。

今先生が予算らしい予算が付かないままお始めになって以来、この四十年の歴

史というのは、絶えずお金の問題がつきまとい、苦しいなかで何とかやりくりしてきたのが芸術祭の歴史、ということがいえると思います。ところで、芸術祭と演劇というのは、いろいろかわりが深いと思うのですが、昭和四十八年から審査委員をされて、藤田先生、振り返ってみまして、演劇との関係で、芸術祭の四十年の歴史というものを、どのようにお考えになっていますか。

### 原点に戻って

芸術祭賞を、資料で見ますと、昭和二十二年に梅幸、歌右衛門、二十四年に、幸四郎、團十郎、雀右衛門が当時の名優に伍して取っているんですね。

ということは芸術祭の賞を取った当時の若手が、その後ずつと伸びて、戦後の歌舞伎のリーダーになってきた。つまり、芸術祭とともに、その人たちが伸びてきたんじゃないかと、という気がするんです。演劇の場合ですと、昭和三十年ころは、歌舞伎と新派と新国劇が大変いい仕事を、それに賞が行っている。

そして昭和三十年代の末ころからですか、例えば、芸術座で主催公演というのが始まって、「放浪記」ですとか、いろいろないい芝居をやっています。ですから、演劇というのは、やはり、芸術祭とともに歩んできたという方がいい方ができるんじゃないか、という気がするんですね。

私は昭和四十八年から審査委員をやるようになって

### 映画は川が流れるように作られる

そうですね。思い出すと四十年というのは大変長くて、いろんなことがあるんですね。今日出海さんが、焼跡に文化をと、か、焼跡に芸術の花を、というように文化を流れたのは、まず最初にとかく始めて、それが少しずつ実際の効果を上げていくだろうと考えられたのだと思います。

芸術祭がどういうふうな広がっていくかわからないけれども、とにかく、やっていけば段々とそれを見る人たちが肥えてくるだろうし、やってくる人たちも刺激されて育って行くだろうという期待が私たちにもありました。そしてその後に映画も入ってきたのですが、私はこれには疑問を感じておりました。というのは、芸術祭があるから、いい映画を作ることではないんです。映画はいつも流れるように、次から次へと作られているわけです。それがたまたま芸術祭のシーズンにいい作品が封切られると、それを参加作品とするということだけで、そうでない時期にも、いい作品もあったのです。いわば川の流れるから水をすくってやるようなもので、その水でなければいけないということはないという気持ちがいっぱいありました。

小津安二郎さんが現役で映画を作っておられるころ、撮影を見に行きますと、「また、芸術祭だつてさあ」というじゃないですか。君の映画は芸術祭参加作品にするから、それに間に合うように作ってくれ



山田 洋氏

昭和二十年代の前半に私たちが見た芸というのは、戦争中になら、ためうっ積してきた人たちが、やつと自由になって、芸が伸び伸びとできるという状態のもので、人生をかけた、その芸の輝きというものがあったような気がします。それが日本にいまはなくなりました。ヨーロッパに行きますと、そういう生活のゆとりみたいなのがありますね。そうですね。グルベローバの歌曲なんかを、じっくり聴いてみようというお客さんがいっぱいいますね。ああいうお客さんというのは、ぼくはやっぱり伝統だと思いますね。われわれの子どもの時は、日常生活の言葉の中に歌舞伎の名せりふがみんな出てきましたよね。イタリアなんかへ行

っても、ほとんどの人がアリアなんて聞いて知っているし、それから、ウィーンのオペラハウスを建て直すときには、ウィーンの市民たちが、自分たちで金のない者は労働奉仕に出てきたりなんかして、持っている人は、これを使ってくれというふうになつて、つまり、私たちのオペラハウス、私たちのオペラというわけですね。

それから、先程、吾妻さんが審査委員について言

われましたが、芸術祭がともかくも今日まで続いた

というのは、誰が見ても、一応見識のある人が審査

委員の大半を占めていたからですね。芸術祭賞がと

にかく何か意味があると認められるのは、多くは賞

に値した芸が選ばれてきたからこそいえるんじゃない

ですか。今日まで続いて、軽視されないという

のは、そのためだと思っんですね。

芸術祭そのものがやる方にも、見る方

にも、芸に対するひたむきな熱望をかき

立てる。恐らくそれが理想の在り方として

ての芸術祭なんだろうと思うんですが、それがいろ

いろ変化を経てきて、いまだという立場にあるのか、

良く考えてみる必要があるかと思ひます。

ところで今年からは、媒体芸術が、芸術祭の参加部門からは外れ、代わりに年間を通じての芸術作品賞が新設されました。昭和二十七年当時から、映画の部門を中心として芸術祭をご指導いただいております登川先生、振り返りまして、どのようにお考え



登川直樹氏

といわれたというんですね。芸術祭に間に合うという事は、梅雨のころシナリオを書いて、真夏の暑いときに撮影するという、映画作りとして一番条件の悪いときに作らないといけないわけで、「見るほうは一番芸術的なシーズンかもしれないけれど、作るほうはかなわん」というようなことをいつておられましたね。でも小津さんの映画は皆は当たらないといわれたのが、芸術祭参加のころから、段々当たるようになってきました。やっぱり、芸術祭というのは、見るほうを刺激したので、そういう効果は非常にあったんじゃないかと思います。

ただ、外国映画が入ってくるなど芸術祭が膨れに膨れてきました。そこで、芸術祭の見直しをした昨年の芸術祭懇談会では、もっとお祭として、実際に人が何かを演じるということを中心にしてやれば、非常にすっきりした芸術祭になるだろうなと思い、媒体部門を整理することにしました。

それから審査について言うなら、審査委員についても、初めからできた良い審査委員がいるわけじゃないんですよ。みんな非常に若いときから、どんどん審査をやって行くうちに段々いい審査委員になって行ったんですね。ですから、審査委員もやっぱり育て



北村一夫氏

てほしい。意見の違う人とディスカッションをしたり、なぜ自分がいいと思わない作品を他の人はいいというのかを、自分が考えるというふうなことをしているうちに、優れた審査委員ができてきたらいいですね。

日本映画というのは、戦後の最初の二十年が発展期なんです。あとの二十年は、テレビに押されたりして下り坂で、非常に厳しい時期です。その二十年の発展期と、二十年のはっきり後退期ともいえる時期の両方を経験しながら、私は、芸術祭は映画界にとっては非常にプラスになっていたと思います。映画はもう駄目だという人もいますが、非常に厳しいということであって、決して駄目じゃないんですね。その厳しい試練のなかで、いかにしていいものを作るかということ。作家も、見る人も勉強しなければならぬわけですね。

映画部門に関しては、これからは、これからも、協賛公演あるいは主催公演の形で参加いただきますし、今度新設されました芸術作品賞とあわせて、いい映画というものは、今後も育てることに、この芸術祭なり、あるいは新しい芸術作品賞の制度が役に立てば大変うれしく思います。

ているのではないかと思います。例えば、演劇部門に朗読やドサ芝居が入ってくるのか、あるいは一人芝居と称するものが入ってくる。舞踊部門にも、民謡舞踊風なものも入ってくるんじゃないか。音楽部門も同じですね。

それを例えば、純粹なクラシックなんかと比較された場合、果たして賞がもらえるものかどうかというところを、実は心配もしているんですね。

### 変わっていく芸術祭

演劇のほうでいいですと、すっかりしたて、いわゆる演劇部門の四部門に変わったのはよろしいのですが、いまおっしゃったような大衆演芸のほうから朗読も回ってまいりましたし、ミュージカルも入ってまいりました。それから、音楽部門がなくなつたんで、能も入ってまいりました。これは審査する側からいいますと、どういう目盛で選んだらいいかということが、大変な問題だと思っただけです。

しかし、演劇というものが、大体この二十年間で非常に多様化してきております。つまり、アンテラ演劇もあれば歌舞伎もあれば、能もあれば、一人芝居もあり、ミュージカルもある。こんなことは四十年前に考えられないことです。演芸という、何か一段低く見られるという感じもしないではないんですね。私なんかは、浅草で演じられているものは、みんな演芸だと思っただけなんですけれども、

でもありがたいと思っただけです。そこで北村先生、一番幅の広い観客層をお持ちになつて芸術、大衆部門は、やはり芸術祭というものを国民の間に膾炙（かいしゃ）させるために非常に大きな役割を果たしていると思うのですが、どのようにお考えになりますか。

### 大衆芸能部門から演芸部門へ

大衆芸能といいますが、本年度から演芸部門と名前が変わりましたが、何か、何かい

つも付け足してみたいな感じで、大衆芸能のどこに芸術を認めているかということに私どもは疑問を持っています。今度、大衆芸能部門から演芸部門というふうに変わりまして、参加公演の大半が、よその部門に移ってしまい、演芸そのもののだけになりまして、審査は大変やりいと思います。その代わり大変寂しくなりました。

正直にいうと、ここ数年、演芸家の間で、あいつが賞を取ったのに俺が参加して落ちたら格好悪いというような観念がありまして、賞をとる実力があるのに参加してこない人も、かなりいるのではないかと感じています。それでもやっぱり枯木の山ののぎしやられると、やっぱり、それだけの数を揃える。舞踊部門のように、ほとんどは落としてしまうのも一つの見識ですが、総花式に、それなりの芸の人には賞を出そうというふうな考え方も、あるかとも思います。これからどういうふうに変わるか、実は大

いまでは演芸といいますが、落語、講談、浪花節、それに色物だけで、それ以外のものは演芸でないわけですね。

今回の芸術祭見直しを検討した芸術祭懇談会では、言葉を決めるときに、かなり気を遣っていた。大衆芸能という言葉を使うと、かえって低く見られる方もいるんじゃないか、だから演芸という言葉を使ったほうがいいんじゃないか、ということになったのだと思います。

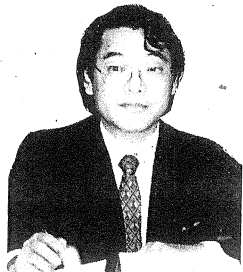
### 司会

いま芸術の見直しの話にもう入っているわけですが、ただいまのお話をおうかがいしましたが、昨年、芸術祭懇談会で打ち出された見直しの方向が実は、そこで初めて出てきたのではなくて、すでに以前から、いろいろご議論いただいたものの集約だということを、改めて感じました。

そこで、この五月の総会で今先生に次いで芸術祭執行委員長に選ばれました安達先生に、新しい芸術祭をお作りになる立場から、将来へ向けてのご期待なりご抱負があれば、一つお願いいたします。

### 芸術祭のお祭化

別に抱負というほどではありませんけれども、芸術祭をお祭化するということが、非常に人々を沸かせるようなものでないか、お祭にならないかと思っただけです。たとえば参加公演ですけれども、今度



渡辺芸術課長

それから表賞式について一言いわせていただくと、昭和四十三年のころは表賞式に家族席というのがありまして、自分の家族あるいは親類なんかを大勢呼んで大宴和やかであつて、しかも大宴にいい雰囲気であつたわけなんです。いまでは、会議室でさつさつと卒業免状みたいに渡しますけれども、そのころは一人ずつ、文部大臣から賞状をいただきまして引き返してくる途中、舞台のまん中であつて、それを見るという回して家族席のほうへ賞状を見せて、「自分はこの賞をいただきました。ありがとうございます」といって、家族席にお辞儀をして戻ってくる習慣があつたんです。それが四十三年に演劇部門で受賞された秋元松代さんが、文部大臣からいただいた、ずっとそのまま自分の席へお帰りになつたやつ。そういうところの人もみんなそれを真似して、家族席に見せるということがなくなつてしまつたんです。あれ以来、いままだに簡略された表賞式になつてしまひ（笑）、一向に感激がないのは残念です。それから昨年までは大衆芸能部門の一部、二部に参加していた公演が、今年から他の部門へ回つてしまつて、ほかの部門の審査委員が、かなり戸惑われ



また芸術祭の期間が短縮されましたが、参加公演については、期間の短縮化はたしていいのか、どうかという問題もあるような気がします。審査委員の先生方も、あつち行ったりこち行ったり、掛け持ちができた大変で、むしろ、参加公演というのはもう少し期間を長くして、そのなかで十分審査をしていただいたほうがよくないかという感じがします。それからもう一つは、賞をもらったということで、非常に名譽だ、そしてよかったということですが、例えば、踊りの場合に一晚のために一年間苦労されたものが、一回で終わってしまうのです。せめて賞をもらった出し物は翌年再演するとか、翌年の主



催公演のなかに入れるとか、そういうことをすれば参加公演は、ただ賞金をもらっただけじゃなくて、それこそその次が本番になるぐらいに考えるんですね。参加公演が一年で終わらないで、翌年の主催公演のなかへ入ってくるようなふうにして、両者をつなげることはできないだろうかと思っています。そんなふうにして主催公演のレパトリーを積重ねていくなど考えられませんか。

映画も日本映画だけじゃなくて、外国映画で非常に感動的なものを、何かやる方法はないか。そして、その時期になったら、何か芸術祭だという感じで、お祭だという感じがでてくるんですが。従来の主催公演のままで、なかなかお祭化にならないのではないかと思います。

**司会** いま安達委員長のほうから、将来に向けて思い切った示唆をいただきましたが、こういった将来へ向けての期待とか、展望がございましたら、ご発言をお願いしたいと思います。

**宮澤** 例えば芸術祭で創作オペラみたいなものを作るべきだと思います。創作にはいいものもあるし、あまりないとしたことのないものもあります。しかし去年の主催公演のオペラ「祝歌流る夜」みたいに、きた人がみんな感心し、あるいは感動してくれるものもあるのです。

そういうものに再演の機会を与えて、芸術祭が生んだいいもののレパトリーというものを築き上げて行くということは、絶対に必要だと思います。それから、そういう作品を、そのあくる年でもいいから、何かの形で地方に持って行くことを考えて

らう。地域劇団東京演劇祭が主催公演として組まれています。これは素晴らしいことだと思います。それは最後にもう一方、お話しを

**司会** うかがいます。

**登川** 「体育の日」というのがあります。よう。私はやっぱり「芸術の日」といったものがあるべきだと思うんですが。芸術というのは一週間とかひと月とか、盛り上がるということが必要なので、例えば、十月を「芸術月」にして、そのときはもう東京でもやるけれど、地方にもどんどんやってもらう。そういうことを毎年やって行くうちに段々みんなも、そのころは、いつもあんまり見ないお芝居も見ようかというふうな気分になったりなんかする。そういう一般の人たちが、もつと芸術に親しむ機会を作るための方法としては、やはり「芸術月」とか、「芸術週間」とかいうふうなことも考えてもいいんじゃないでしょうかね。

**司会** 芸術祭は公式な意味での国が定めた月間や週間ではありませんが、正に今おっしゃったような目的のためにあるわけですね。芸術祭がもつと人々によく知られて、その期間中には必ず国民が何か見に行くという習慣ができれば、大変よろしいんじゃないかと思

**富澤** 外国には芸術週間というのがあり、町も国もあげてみんなのものとして……。

**福田** ひと月ぐらいは必要ですね。

いただけたらと思います。

**田辺** いまのお話のお祭化ですが、それは日本人に対してするお祭だけでなしに、もう少し国際的に考えてほしいと思うんですよ。例えば、日本舞踊だけで一日、それから邦楽だけで一日というプログラムより、それを一緒にしたプログラムを作って、どんどん外国にも宣伝してほしいと思います。外国からの観光客にも日本を紹介するという気を入れてやってほしい。

**藤田** 私は、昭和二十年の芸術祭と安達さんが拡張なすったころの芸術祭、それと今日の芸術祭は、やはりどんどん変わってきていると思うんです。この芸術祭が、これから漫然と続くというふうには考えないで、この際、五年なり十年なりをめどにしてこの間に何をやるかという目的を決めておきます。例えば、十年経ったらその時点で大改革をして時代に合わせていくというふうなすればいいと思います。芸術祭そのものの根本である芸術が心のゆとりであって、われわれの生活に大変有用なものを含んでいるという考えは不滅だと思っています。

それから、日本の伝統をいい形で生かさなければいけないという考え方も不滅だと思いますが、その提供の仕方というのは、時代によってどんどん変わってくると思います。その目的を十年なら十年に区切って、展望を決めて行ったら、より充実した芸術祭が生まれるんじゃないか、という気がしております。

**安達** 日本は十一月三日の「文化の日」の前後にすべきですね。

**司会** 教育文化週間ですね。

**安達** もうあるじゃないか。と、いわれるかもしれませんが。

**司会** いえ、実は今度の見直しで主催公演を十一月の初めに全部移しましたのは、十一月三日の文化の日を中心とした教育文化週間に芸術というものを位置づけまして、国民の間にアピールしたいということからなのです。確かに、おっしゃる通りに、教育文化週間は芸術の週間でもあるのですよということを、もつとアピールする必要がありますかと思

本日はいろいろお話しいただきましたが、そのどれ一つを取りましても、それぞれ含蓄のある言葉で、私もこれをじっくりと考えさせていただきます。

文化庁といたしましては、芸術祭というのは、世界に誇れる国の事業だと思っておりますし、この四十年の伝統を大切にいたしまして、さらに新しい、よいものへ育てて行くために、皆様の御指導を得ながら努力するつもりです。

きょうはいろいろありがとうございました。



**司会** 吾妻先生は、今度は芸術祭熊本公演においでいただくわけですが、今度の見直しの一つの柱としての地方公演といったものについて何かお考えをお聞かせ下さい。

**吾妻** 私、土地の方と一緒にやるのは、大変いいことだと思うんですよ。向こうでよくに発達してるものもありますしね。それから、東京から行って、地方の舞踊家と競演されるということになると、東京の人と便々としてられませんからね。

**藤田** 演劇のほうでいいですと、今年は、全国の地域劇団に東京の劇場で公演しても



美しいものを楽しく観てもらうのが、芸術祭の大きな目的の一つだと、ひそかに思いつつ、参加のたびに頑張っていた。

「ジェル」で芸術祭に参加する少し前に、松山樹子先生が、オーケストラを指揮して、「ジェル」を公演したことがあります。「ジェル」第二幕で、アルブレヒトが、現実には見えないジェルと心の中で踊る場面があります。その部分で先生は、音を伸ばせるだけ伸ばして、先生がまるで自分で踊っているように指揮したのです。あとで先生は、「さぞかしオーケストラの皆さんは、御迷惑でしたでしょうね」と言っていました。当日、故中島健蔵先生が客席で観ていて、「樹さんやるね。さすがダンサーだな。」と言っていたそうです。「ジェル」で芸術祭に参加したときも、それをもとにして、指揮者に細かくお願いしました。

その「ジェル」も、この八月のロンドン公演では、ザ・タイムス紙の評で「今まで観た中で最良のもの」と書かれましたがつくづく多くの先輩方の、細かい積み重ねのおかげと感謝いた

美しいものを楽しく

森下 洋子  
(舞踊家)



心を楽しませる街の中心に劇場があってもいいのです。

芸術祭は、その促進剤でもあると思います。新しい芸術祭では、より楽しい文化を普及するフェスティバルであってほしいと思います、私たちもその意味で真剣に、そして伸び伸びと踊りたいと願っているのです。

宴会好きの全くしょうがない（賞が無い）劇団が創立十五年目に於いて初めて芸術祭賞なるものを頂戴した。併せて紀伊國屋演劇賞までも戴いたものだから盆と正月が一緒に来たような大騒ぎとなった。ご多分にもれずお祭り好きのこの連中は賞金を全部はたいての大感謝パーティ。それとも赤坂の有名なナイトクラブを貸切つての大騒ぎ、それから好調な彼にのつてプロ野球の某球団ではないがV9達成となった。次は痴がましくも大賞を狙おうというわけだ。一作品毎の勝負もいいが昭和五十二年に「矢代靜一・浮世絵師三部作」を一挙に上演したことだし、次は書き下し五作品連続上演はどうかと誠に勝手な企画を打ち出した意外に座内での評判も良く演出部などは全作日替り上演の提案まで持ち出した。幸い劇団には演出者が五人いる、どうやらお膳立てが出来たようで、五組を相手に製作開始となった。脚本の催促、配役の調整、稽古場の確保、予算の整理、倉庫の調達宣伝対策、観客動員と連日の打合わせでてんでこまい。思っていたより百倍大変。

いい気になり過ぎ罰があたっ

芸術祭大賞を受賞して

金井 彰久  
(演劇プロデューサー)



に良いのが反芻する毎日だった。緊張の中で初日が開き、前半の公演日程を全部した中台は遂に帰らぬ人となった。こうして難産で生み出された企画であるだけに芸術祭大賞の受賞は快挙であった。中台もどこかで酒盃を手に大喜びしてくれているだろう。オッチョコチョイの製作者はこれを機に賞を狙うような企画は立てぬことにした。

昭和三十六年、「放浪記」で初主役をいただきました。東にはいつて四年目、主役はもあきらめていましたが、菊田夫先生のお声かかりでした。でも信じられなくて、いずれ正画変更になるだろうと思ってました。それがその年の五月、主役の衣裳をつけてスチール写真を撮ることになり、その時はじめてそのお話が本当であることを実感しました。

当時は、はめると増長するからと言って、一生懸命やってもなかなかはめてくれる人もいませんでした。しかし、先年亡くなられた評論家の安藤鶴夫さんが初日にお見えになり、「ことし芸術祭賞は決まりだね」とおっしゃったという話を宣伝部の人が教えてくれました。大へん人が教えてくれました。大へんですが、また励みにもなったの居がしにくくなり、固くなって毎日毎日が自分との闘いの連続になってしまいました。大へん苦しい毎日でした。

芸術祭賞の決ったときほど、嬉しかったことはありません。

「放浪記」とともに

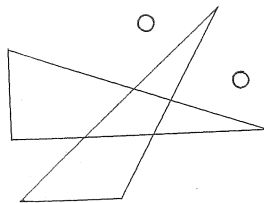
森 光 子  
(俳 優)



ますか、このでんぐり返しの出  
来るかぎりには「放浪記」を演じ  
続けたいと思っています。私自  
身はともかく、二十五年前から  
ずっと裏打ちしながら使ってい  
る衣裳が、この先ちゃんともつ  
てくれるかどうか、それが心配  
です。

たはコツコツと古典邦楽の笛を吹いてきた私は、古典の手法を使つての作曲しかできない。第三回目のリサイタルで初めて嵯峨野・秋濤をお客様の前で演奏するまで、古典の手法だけを使つたこの曲が果たして世の中の人にとついうふう<sup>おほ</sup>に受けとめられるのか、私には全く判らなかつた。それが、昭和三十一年度の芸術祭でまばゆいばかりの賞をいただいた。

芸術祭大賞受賞の報に、私の胸中<sup>こも</sup>には感謝の思いで熱くなった自分が創つた曲の受賞だからという理由<sup>わけ</sup>ではない。長い邦楽の歴史の中で、いつも下積み<sup>しもづみ</sup>の縁の下<sup>もと</sup>の力持ちでしかなかつたお雛子<sup>おひなこ</sup>の、しかもその中でも最も



受賞の時……

六代目  
福原百之助  
(長門離子第方)



りも蔑視する傾向が絶えない。その中で、洋楽の最高峰を極められた先生方が、古典邦楽の手法を芸術として認めてくださった。これ程嬉しいことがあるだろうか。

私の受賞が、邦楽を学ぶ若い人々、特に若いお囃子さんたちの今後の励みになれば、三重の喜びであると思っている。

蔭の薄い地味な存在でしかなかった「笛」というものに光を与えてくださったことが嬉しかったのである。

また、審査員の皆様方の中には、邦楽ばかりではなく洋楽の先生もいらつしやると聞いた。明治維新以来の社会的風潮と曲の成立の起源の両方の理由から、世間一般には邦楽を洋楽よ

# 芸術祭小史年表 40年のあゆみをたどって

## 昭和二年〈第一回〉

文部省社会教育局今日出海芸術課長の発案によって「芸術祭」が発足。予算は付かなかったが、今課長の説得によって、演劇、音楽、舞踊、能楽の各ジャンルから一二〇余の公演が「芸術祭主催公演」として参加、荒廃した当時の人々の心に大きなよびを与えた。当時の公演は、新劇合同公演、或る女、大歌舞伎九月・十月公演（先代菊五郎、先々代幸四郎らによる「鳴神」、「土蜘蛛」、先代吉右衛門、先代猿之助らによる「修善寺物語」、「平家女護島」など）、杵屋六左衛門、常盤津三東勢太夫、豊竹古親大夫らによる邦楽演奏会、藤原歌劇団公演「カヴァレリア・ルステイカーナ」、「パリアツチ」藤原義江、砂原美智子ほか、吾妻徳穂、藤間勘十郎、花柳舞輔らによる邦舞鑑賞会、小牧正英、東勇作らによる東京バレエ団公演（「パガニーニ幻想」、「シエラザード」など）、宝生重英、野村誠、田中幾之助、三宅藤九郎、喜多六平太らによる芸術祭五流能など。

## 昭和二年〈第二回〉

国民生活の現実はますますきびしくなり、その中で芸術祭の実施は困難をきわめた。公演団体の参加意欲を引き出すため、芸術祭の興行に免税措置をとる文部省の主張は認められず、代りに第二回日から第四回日までは、

さらに関西の芸能人の進出が著しく、参加数はかなりでなく、受賞数においてもその勢力が強くなった。

また、テレビドラマに意欲的な参加作品が出はじめ、第一回の「私は貝になりたい」や第一四回の「いろはにほへと」などが生まれ、スポンサーも、芸術祭参加番組に積極的に費用をつぎ込むようになった。

## 昭和三年〈第一七回〉

「芸術祭三市交響楽団特別演奏会」と銘打って、京都市交響楽団、群馬県交響楽団、札幌交響楽団が高崎市で主催公演として競演し、芸術祭の地方への広がりのきつかけとなった。この事業は、翌三八年には札幌市で、翌三九年には京都市で行われ好評を得た。

## 昭和三年〈第一九回〉

東京オリンピック開催。オリンピックの芸術展示として、芸術祭の主催公演の中から、宮内庁楽部の「雅楽」、「オリビック能楽」、「人形浄瑠璃文楽」、松升の「十月大歌舞伎」、「古典舞踊邦楽祭」、「全国民俗芸能大会」が参加、特に雅楽、歌舞伎、民俗芸能大会等は人気を集めた。参加公演（作品）のうちテレビ部門が「テレビドラマの部」と「テレビドキュメンタリーの部」に分化した。

## 昭和四年〈第二二回〉

国立劇場オープン。参加公演のうち大衆芸能部門が「第一部」と「第二部」に分化した。

全公演を「参加公演」とし、優れた公演には文部大臣賞（個人賞、団体賞）を授与することと芸術祭の盛り上りをはかった。参加公演は「演劇」「音楽」「舞踊」「古典芸術」の四部門。期間は九月一日から十一月三〇日の三か月間となる。

## 昭和三年〈第三回〉

参加部門に「映画」と「放送」の二部門が加わる。

## 昭和五年〈第五回〉

国の予算が初めて約五〇〇万円計上され、これにともない再び「主催公演」中心の芸術祭となる。全国民族芸能大会が主催公演として加わる。期間が一月一日から十一月三〇日の二か月間となる。

## 昭和六年〈第六回〉

九月、平和条約締結。この年から芸術祭が「主催公演」と「参加公演」の二本柱で実施されることになる。

## 昭和七年〈第七回〉

昭和五年に新しい放送法が公布され、各地に民間放送局が新設されたのにもない、この年から放送部門に民間放送局も参加するようになる。

## 昭和八年〈第八回〉

参加部門に「レコード部門」と「大衆芸能

## 昭和四年〈第二三回〉

文化庁発足。「文化庁芸術祭」となる。明治百年を記念して「アジア民族芸能祭」等を開催。

## 昭和四年〈第二四回〉

五、六月に「芸術祭懇談会」（五回）を開き、芸術祭の刷新充実をはかる。芸術祭を今日と同様の主催公演、協賛公演、参加公演の二本立てとする。参加公演（作品）のラジオ部門を「ラジオドラマの部」「ラジオ音楽の部」「ラジオ合唱の部」に分化。

## 昭和六年〈第二六回〉

秋季「移動芸術祭」がスタート。この年には埼玉、兵庫、岡山、福岡の各県が集中開催県となり、全国で巡回公演が始まった。

## 昭和八年〈第二八回〉

この年から「移動芸術祭」が、春季にもあわせて行われるようになった。

## 昭和五〇年〈第三〇回〉

芸術祭三十周年の記念事業として「アジア民族芸能祭」を開催。この年だけ芸術祭期間を一月一日から一月三〇日までの二か月間とする。「芸術祭三十周年史」刊行。

## 昭和五一年〈第三一回〉

参加公演のうち音楽部門と舞踊部門をそれぞれ一部（邦系）二部（洋系）に分化。期間は再び一月一日から二月一日の二か月半となる。

部門」が新設され、レコードのラベルに芸術祭参加がうたわれるようになる。

## 昭和一九年〈第九回〉

この年から芸術祭の主催公演は、国の丸抱え方式から、自主的公演のうち特に優れたものを選び、その費用の一部を助成し、芸術祭執行委員会との共催とする方式がとられた。また、初めて映画部門が主催公演に加わり、芸術祭・文部大臣賞受賞映画鑑賞会と映画の歴史を見る会が行われ、放送部門にテレビの参加が始まった。

## 昭和三〇年〈第一〇回〉

一回目を迎え、ほぼ芸術、芸能全部門にわたる祭典として定着した。しかし、芸術祭が中央の行事のみに終始して、地方が顧みられないという声が出はじめた。これに対し、劇団民芸の「西の国の人気者」を北陸、中国、九州の各地方都市へ巡回公演させ、移動芸術祭が生まれる先駆けを作った。

## 昭和三一年〈第二回〉

参加部門のうち、映画部門が「日本劇映画の部」「日本記録映画・動画の部」「外国映画の部」の三部に分かれる。

## 昭和四四年〈第一四回〉

参加部門のうち、レコード部門が「国内盤の部」「外国盤の部」、放送部門が「ラジオ部門」と「テレビ部門」に分かれる。

## 昭和五五年〈第一五回〉

参加公演の大衆芸能部門に初めて漫才が参加し、またレコード部門には大衆音楽も参加

## 昭和五二年〈第三二回〉

特別公演として「日本民謡まつり」がスタート。

## 昭和五三年〈第三三回〉

特別公演として「ミュージック・フェスティバル」がスタート。芸術祭大阪公演が始まる。

## 昭和五五年〈第三五回〉

参加公演のうち、第一部、第二部に分けられていた音楽部門と、邦舞、洋舞に分かれていた舞踊部門が再び一本化。

## 昭和五八年〈第三八回〉

参加部門のうち、レコード部門の「国内盤の部」と「外国盤の部」を「レコード部門」に、ラジオ部門の「ラジオ音楽の部」と「ラジオ合唱の部」を「ラジオ音楽の部」にそれぞれ一本化。

## 昭和五九年〈第三九回〉

芸術祭見直しのための「芸術祭懇談会」が一回にわたって開かれ、(1)芸術祭を舞台芸術中心のお祭りとする、(2)地方へも拡充すること、(3)国際化することの三点を柱とした改革案が提案される。初めての名古屋公演として、オーケストラ・フェスティバル・イン・ナゴヤを開催。

## 昭和六〇年〈第四〇回〉

芸術祭懇談会の答申に基づいて新芸術祭として再スタート。芸術祭四十周年とNHK放送開始六十周年を記念したアジア民族芸能祭が特別公演として開催されたほか、初めて県との共催による地方公演を、熊本で開催。

○昭和二十一年に始まった芸術祭は、今年で四十回を迎え、十月一日には皇太子、同妃両殿下の御臨席の下、昭和六十年芸術祭祝典が行われました。今月号では、これまでの芸術祭の歩みをふり返り、またこれからの芸術祭への期待をこめて、芸術祭四十回記念特集をくみました。

○芸術祭に關与してこられた先生方による座談会、回想、またエピソードを通じて、芸術祭が、演劇、音楽、舞踊、演芸さらには映画、テレビ等の各分野で、我が国芸術の振興に、いかに大きな役割を果たしてきたかが痛感されます。

○今年度から、芸術祭は、実演芸術を中心とした「芸術の祭典」として再出発することとなりましたが、座談会での芸術課長の言葉にあるように、芸術祭は世界に誇れる国の事業であり、四十年の伝統を大切に、皆様の御指導をえながら、さらに新しいよいものへ育ててゆきたいと考えています。

(S)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課  
TEL(〇三)二六八二二四一(代表)

「文化庁月報」 十月号

(通巻第二〇五号)  
昭和60年10月25日印刷・発行  
編集 文化庁

発行所 株式会社 きょうせい  
〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号  
本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号  
営業所 千代田区新大塚西五軒町52番地  
電話(〇三)二六八二二四一(代表)  
振替口座 東京 九一六一番  
印刷所 (株)行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)  
年間購読料 二、一六〇円(送料共)